

## 『夏之御文』

岐阜教区第3組 河野圓城寺 藤井英俊

インターネットが全盛の今はメールやラインがコミュニケーションの中心となり、若者だけではなく誰もがすぐに連絡がとれる手段としてとても便利な時代になりました。相反して暑中見舞いや年賀状などいわゆる「お手紙」は段々衰退しているようです。

そんな現代においても今から500年以上の昔、蓮如上人が各地の門徒あてに書かれたお手紙は『御文』となって私たちに届いています。

『御文』はお経などと違って仮名で書かれ、わかりやすいお言葉ではありますが、同時にとても厳しいお言葉も多く書かれています。

そんな中で「なつのおふみ」と書いて「げのおふみ」と読むお手紙が日本各地の別院をはじめ、ここ岐阜別院においても毎年8月1日、2日に拝読されています。

そして内容はやはりここでも厳しいどころか怒りのお言葉さえ並んでいます。4通目では「みなみな人目ばかり名聞のていたらく、言語道断あさましくおぼえ候」とおっしゃっています。夏も盛りを過ぎるまで聴聞に来られた在家止住の方々に対して「学ぶどころか人の顔色ばかりうかがって解ったようなふりをするのはけしからん」とでも訳しましょうか。

寒い冬が終わり農繁期も一段落したこの時期、暑さを言い訳にフツツとサボり心が湧き、心が弛んできた私達を見透かしたように叱りつけていらっしゃいます。蓮如上人はこのお手紙を書かれた翌年の85歳で亡くなられています。まさに最後の思いを文字にせずにはおられなかったのでしょう。いつのまにか叱られることがなくなり偉くなってしまった私たちを500年過ぎたいまでも夏之御文によってしっかり叱ってくれているのです。